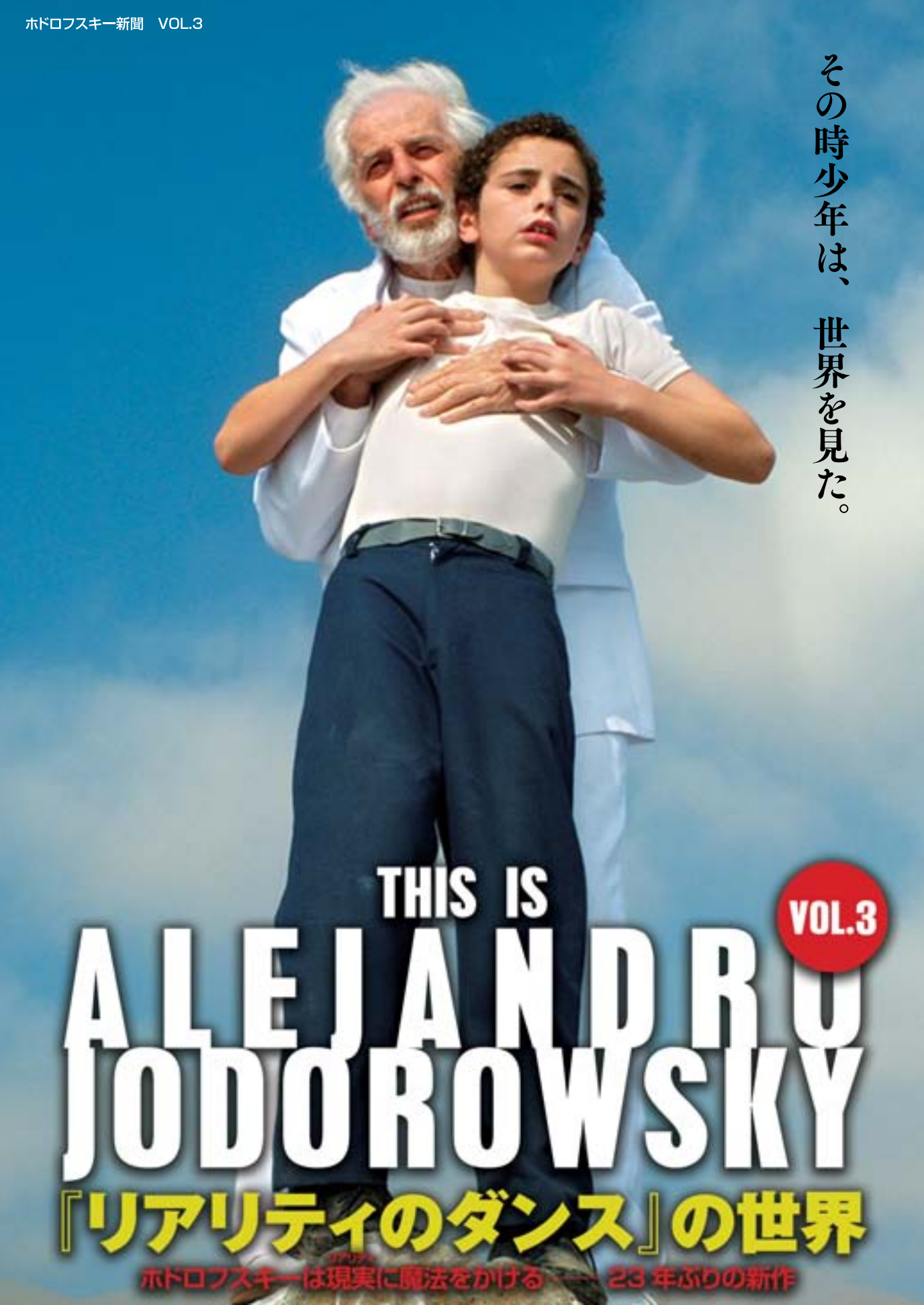

その時少年は、世界を見た。
THIS IS
ALEJANDRO
JODOROWSKY
VOL.3
『リアリティのダンス』の世界
ホドロフスキーは現実に魔法をかける
23年ぶりの新作

COMMENT リアリティのダンス 私はこう観た!!

ホドロフスキー監督は、母親のお腹の中にいるときから超現実主義者だったのかもしれません。7ヶ月になった頃には羊水の中で目を見開き、キョロキョロしながらこう考えていたことでしょう。“この単調な暗闇は本当につまらないな...” そして、その次の月には“誰が私をこんな監獄に入れたんだ? 脱出してやろう。わたしは自由が欲しい!” そんな超現実主義者の待望の新作のタイトルはなんと『リアリティのダンス』です。
彼は歳をとって現実主義者になったのでしょうか。だからといって驚くことはありません。なぜならそれは“ダンス”だからです。**この美しき愉快な映画は最初から最後まですべてが“ダンス”です。** 俳優だけでなく、カメラの動きも、被写体の色も、日差しまでもがすべて“ダンス”なのです。首吊り自殺した人がブラブラと動くのも“ダンス”。すべてのセリフが歌であり、音楽なのです。大きな怒鳴り声も歌となり、銃声ですら音楽となるのです。この莫大なエネルギーが一体どこからくるのか知りたければ、ドキュメンタリー『ホドロフスキーのDUNE』をご覧下さい。ホドロフスキーは、死んだにもかかわらず、約二百年後にお棺を壊しよみがえる者だということがお分かりいただけるでしょう。彼は魔術師であり、錬金術師であり、戦士であり、ツァラトゥストラ。どんな事もできる上に超現実主義者。“死ぬ”なんて退屈すぎて耐えられないことなのですから。

パク・チャヌク
（映画監督）

チリの親子三人の精神と政治の遍歴を映画の魔法だらけで描き、笑わせゾッとさせ心震わす。 自分が『エル・トポ』とかを観た時代、ラテンアメリカ文学の文脈で考えてなかったなあと今さらながら。マジックリアリズムの、そのリアリティ!（Twitterより）

いとうせいこう
（作家・クリエイター）

まず題名に惹かれました。見終わってみると、まさに題名通りの映画だということが分かりました。事実はときに劇的ですが、あくまで冷静で踊らないと思います。でも事実に根ざしながらも、事実から解放されて踊るのが現実です。事実は私たち人間の外部に確固としてあるものですが、現実は私たち人間の外部だけでなく、内部にも流動的に生き生きと存在するものだと思います。
ラテンアメリカ文学でおなじみの、**超現実的で幻想的な筋立てとイメージは、見る者を幻惑すると同時に、その先にある私たちの魂にかかわるリアリティへと導いてくれます。** 子どものように無邪気で、子どものように過去にも未来にも夢中になっている愉快で元気なホドロフスキー 85歳、2歳年下の私には共感するセリフがいっぱいあります。

谷川俊太郎（詩人）

フリークス、道化、断髪。
今までホドロフスキーがその美しい映像の中に何度も差し込んできたメタファーです。しかしそれらがあまりに難解、かつ衝撃的だったため、数十年前の世界は彼に「カルトムービーの開祖」なんて称号を与えたのでした。しかし、この傑作『リアリティのダンス』をもって、その謎はいよいよ解かれたのです!
我々ファンが、そしてなによりホドロフスキー自身が探し求めたその答えは、彼の故郷（セットではなく実際の生家を再建して!）と家族の記憶がもたらせました。また、それを演じるキャストやスタッフにも自らの血縁を配する、という徹底したリアリティ。そう、まさしくタイトル通りの!
ホドロフスキーにとって現実という「肉体」はいつだって損傷し、醜く欠けていたのです。**わずか100年足らずの人生、わずか100分ちょっとの映画。**
そのあいだに美しく伸びては無残に切り落とされる頭髪も、ぼくらと芸術の関係によく似ています。**儚い人間の儚い夢とリアリティのダンス、映画の真髄。**

志磨遼平
（ミュージシャン/ドレスコーズ）

1971年にニューヨークで「エル・トポ」を観た夜は眠れなかった。映画館の中はパンドラの箱が開いたような騒ぎだった。その後「ホーリー・マウンテン」を実体験し、今度は「リアリティのダンス」だ。この映像を言葉にする能力は僕にはない。「頭の声ではダメ、自分の内側から出す純粋な声」、と映画の中で語らせるホドロフスキー。言葉を無化する彼の肉体感覚は彼の中に宿る少年の魂である。その少年の魂こそが心の声である。思わず眼をそむけたくなるシーンに出くわした時、私たちはそこに真の現実と対峙していることを忘れてはならない。「よく見ろ」、現実を直視せよ、そしてあなた自身を知れ! この映画は主人公に与えられた試練ではなく、映画を共有する私たちに与えられた試練であることを認識しなければならない。

頭でっかちの理屈人間は観ない方がいいだろう。「神はいない、死んだら腐るだけだ」。あとは知らん、そんな映画だった。

横尾忠則
（美術家）

彼はこの映画を撮ることで、**自分のトラウマを癒し、一族の闇を癒し、異様な偏りを持つ人物たちだった両親を癒しています。**
あらゆる暗喩とめくるめくイメージを使って、
フロイト的なものと呪術を絶妙にごっちゃにする手法も健在!
そして自分の人生をある意味では完成させたと言えるでしょう。
全ての意味で目に見えない魔法がたくさんつまった映画です。
これを観ることができてほんとうによかったと神に感謝したい気持ちです。
私の人生はホドロフスキーに強い影響を受けているので、
ここに至るまでの彼の人生の深みやこの映画が実現した奇跡を思うと、
歳をとるのがすごく楽しみになってきました。

よしもとばなな（作家）

「リアリティのラストダンスは私と」

ホドロフスキーが新作を撮ったと聞いて、奇跡だと思った。あの幻のSF映画『Dune』が製作中止になったとき、この中断は神か悪魔か、どっちの思惑なんだ? と世を呪ったものだが、この自伝映画を観て、はっきりわかった。こうなった原因は神でも悪魔でもない、すべてがリアリティであるからだ、と。
リアリティほど残酷で気まぐれな力はない。この父親を持ち、この母親から生まれたのは、偶然にすぎないのだが、「自分」というリアリティが起動した瞬間から、すべては「運命」に変わる。だが、さらに奇怪なのは、リアリティを受け入れた段階で「過去」という名の「幻」にも変容することだ。**ホドロフスキーが一家総動員で作り上げたリアリティが、いま一本のマジカルで美しい映画になった。** 今度は、観たわれわれが、それを自身のリアリティに戻さないと、ホドロフスキーとのダンスは終われない。

荒俣宏（作家）

原作の自伝を読んだとき、少年時代の想像力の出入れの有り様を、よくぞ言葉のARのように上等に書いたものだと感心した。「聖なる悪辣」と「過激な畏怖」もほどよくリミックスされていた。それにくらべると青年期以降のことは、次から次に出てくる思想芸術家たちの顔触れこそファンタスティックではあったけれど、中身は前衛大人のエクリチュールになりすぎていた。
実は今度の23年ぶりの映画には、きっと執拗と一人よがりを見せられるのだろうと予想して、あまり期待していなかった。なにしろアレハンドロの自伝映画なのである。寺山修司だって苦労した。こういうことはフェリーニやウッディ・アレンに任せておいたほうがいい。
ところが見てみて、驚いた。原作の少年期だけを抜き出して、抒情魔法のようにみごとに蘇らせていた。**記憶の中の家族、配役にあてた家族、本人の家族幻想とが三重になって、音楽テキスタイルになっている。** 生まれ育った港町トコピージャの時間を泊めた風情が人着映像になっている。抑制も効いている。ナラティビティも細部まで見える。登場人物たちの役づくりもいい。**なによりも心が攫（さら）われた。** アレハンドロ、映画もうまくなったじゃないか。みんなも、見るといい。

松岡正剛
（編集工学研究所所長）

ホドロフスキーの作る映像や物語はとても魔術的だ。『ハリー・ポッター』などのような魔法をあつかったおもしろい映画は幾つもあるが、ホドロフスキーの魔術はその対極にあるようである。
本編『リアリティのダンス』で、海に向かって伸びた桟橋は、宇宙に向かって伸びているようであり、漂泊する魂が行き来するよりどころのようでもあり、これを見ているだけで切なくなる。
子供たちが海でオナニーをする。これは、象徴的に木の棒が使われているのだが、主人公の少年のみ、その先の形状が他と違って丸くなっている。もちろん、説明はないが、これで、少年が割礼をすませているユダヤ教徒ということがわかるのである。
父親の放浪は、まるで、オイディプスやオデュッセウスのたどった神話の旅をなぞる旅のようでもある。
これがそのまま魂の再生の旅となっているのだが、その様子が、なんともなんとも、ホドロフスキーなんだなあ。
ああ、ホドロフスキーに100億円出して好きなように映画を撮らせてやろうという大金持ちはどこかにいないものか。

夢枕獏（作家）

オリヴェイラより下だが、ゴダール、アレンより年長である<消えた監督>が見せる驚異の狂い咲き。**全く老成を感じさせない多産系エネルギーに満ちた、今や世界でもほぼ唯一の名実共にカルト監督。** 総てが成功した松本人志。エログロをたっぷり盛ったフェリーニのアマルコルド。半世紀で反復する末期ルイス・ブニュエル。「DUNE」の喪失という映画史上屈指の分岐点からの40年、リンチ版の公開から30年という凍結された時間を、何のエクスキューズもなく解凍する天真爛漫さと、俗っぽいほどの拝金主義への呪詛。余りにも解りやすい受難劇のストーリーと、精神分析と宗教哲学との決して溶け合わないアマルガム。代表作からの引用であるかの様な、懐かしくも恐怖と覚醒に満ちたワイドショットの数々、何より登場人物である末息子によるオリジナル音楽の素晴らしさと、劇中ただ一人だけ、本作をオペラとして総ての台詞を歌で表現するソプラノ歌手パメラ・フローレスによる歌唱が織りなす映画音楽美は圧倒的。

菊地成孔
（音楽家/文筆家）

「エル・トポ」を観たのは御多分に洩れず18歳の頃。自分も「カルトな存在になりたい!」といきがっていた時なので、そりゃあドンピシャでした。そして今回の「リアリティのダンス」。ホドロフスキーも歳をとったけれど、こちらも歳をとり、父にもなった。以前とは違い、結構しみじみと見ました。ホドロフスキーと自分との、歴史的・地理的・個人的違いを噛み締めながら。だって舞台は地球の裏側、こちらは少年の彼を疎外した、ピノキオではなくバナナを持った黄色人種ですからね。とはいえさすがラテン育ち、時代考証はたぶん意図的にテキトーなんだろうし、全編音楽に満ちてテンポ良く、ほとんどギャグみたいなシーンも織り交ぜた陽性の映画。楽しかったです。まったく、**ホドロフスキーみたいに「殺しても死なない」感じのジジイになりたい**もんだけど、無理だろうなあ……。

会田誠
（美術家）

日本での公開当時、『エル・トポ』はキッチュアートの最高峰だと評されていて、もちろん、僕もそのように大好きだった。ハリウッドに対抗できるケレンを見せながら、物語としてハリウッド的なものを拒否している、僕にはそのように見えていた。だから、仕事を始めた頃から、いつも頭の片隅にホドロフスキーの作品があった。ある意味、ホドロフスキーは僕の『神様』だった。
しかし、今作『リアリティのダンス』を観て、**こんなにも時代に繊細であったことに、今更ながら気づかされた。ケレンよりも『心の共感』があった。** 今の、このネット映像時代に、こんな映像体験ができたことに驚いた。震えた。全てが美しかった。癒された。**やっぱりホドロフスキーは僕の『神様』だった。**

幾原邦彦（アニメーション監督／『輪るピングドラム』）

©photos Pascale Montandon-Jodorowsky

REVIEW

魔術師ホドロフスキーは映画で現実を踊らせる

TEXT：柳下毅一郎（映画評論家・特殊翻訳家）

魔術とはなんだろう？　それは原因と結果を取り違えることである。現在が過去に影響を与えると信じ、現実を操作して未来を書き換えることである。いやそれとも過去を変えるのだろうか？　どちらでもいい。ふたつはどうせ同じことだ。

チリの鉱山町トコピージャは怪奇と驚き、フリークと呪術に満ちたホドロフスキー的世界である。その町で少年アレハンドロは、暴君のような父に欺うように話す母のあいだで辛くも魔術的な生を送る。苦しむアレハンドロの前に老ホドロフスキーがあらわれ、優しく抱きしめる。「辛いことはやがて過ぎ去り、この苦しみがやがて実る日が来る」そうやってホドロフスキーは自分の過去を語っていく。過去の中には未来が含まれており、未来のホドロフスキーは過去にすでに存在しているのだ。

ホドロフスキーはこのち、サンチャゴに出て、メキシコに行き、パリに向かい、そこで驚くべき演劇を演じ、映画によってセンセーションを引き起こし、世界一狂った映画を作ろうとする。その萌芽はすべてトコピージャにある。すべてはそこにくるんこまれているのだ。だが、それを逆に見ることもできるだろう。つまりホドロフスキーは現在から過去を見て、過去を書きなおしているのだと。今のホドロフスキーにつながるような出来事だけを選びだし、過去を捏造して記憶を改変しているのだ、と。

ホドロフスキーは大いなる語り部だ。語り部は事実を誇張し、現実を歪曲して物語を作りあげる。こ〝信じられた人間は、そこで作りあげた物語を身にまとうことができる。みずから作り出した伝説を自分で演じられる。それは神話的英雄と呼ばれる。あるいは魔術師とも呼ばれる。

ホドロフスキーは現実に魔術をかける。自分の過去を作りあげ、そのことで現実の姿を変える。ホドロフスキーの手によって、トコピージャは魔法の地に姿を変える。暴君だった父親は救済され、犠牲者だった母親は救しと救いの身ぶりに変じる。ホドロフスキーのサイコマジックとは、儀式によって無意識に働きかける行為なのだという。無意識が信じれば、嘘は嘘でなくなるのだ。であればホドロフスキーは映画によって世界の無意識を騙ろうとしているのかもしれない。世界を騙し、現実を踊らせる。それが魔術師のダンスなのである。

INTERVIEW

写真：西岡浩記

☆ALEJANDRO JODOROWSKY☆

アレハンドロ・ホドロフスキー監督インタビュー

「私はこの映画の中で自分が誰だったのかを探し出した」

23年ぶりの新作

“私は映画以外の、詩やコミック、サイコマジック（監督が提唱する独自の心理セラピー）の発明などで、23年間創造することを止めませんでした。23年間映画を作らなかった理由は、映画的に言うべきことがなかったからです。私は商業映画監督ではなく、映画で生活しようと思ってはいません。もしそれなら毎年一本映画を撮らないといけなくなってしまいます。誰もが毎年新しく言うべき事を持っているとは思えません。『ホーリー・マウンテン』から『サンタ・サングレ/聖なる血』まで6年掛かりました。『ホーリー・マウンテン』が終わった後、自分の中に何も残りませんでした。『DUNE』の時もそうです。企画だけでしたが全て吐き出しました。”

何故今自伝を作ったのか

“この作品は自分の人生をベースにした物語です。もし、私の人生が本物だと証明されれば、全ての人たちの人生も本物なはずです。子供の頃の傷は誰にでもあるものです。この物語は多くの人に共感してもらえると思います。これは、心の治癒のようなものなのです。

私は過去は変えられると思っています。過去というのは主観的な見方だからです。この映画では主観的過去がどういうものか掘り出して、それを変えようと思ったのです。

例えば、撮影をした故郷のトコピージャの家の前の通りは、子供の頃、私にとって巨大な道でした。しかし、実際はせまく小さかったのです。

少年時代、私はとても苦しみました。でもそれは主観であって事実ではなかったのです。本当に起こったことではなく、子供から見た主観の解釈なのです。

この映画で重要だったのは、両親を再構築した事です。母は胸が大きかったので、胸の大きな女優を、子供の頃の主観で選びました。母はオペラ歌手になりたかったのですが、両親に反対され、店の売子になってしまいました。抑圧されたアーティストです。ですから私は映画の中で彼女をオペラ歌手にしたのです。このように映画の中で自分の思い出を変える事で、打ち捨られた母ではなくオペラ歌手の母を再構築する事ができたのです。それは、自分の魂にとっても良い事でした。父親もそうでした。抑圧例だった父を、映画の中で人間的な父親にしたのです。そして、バラバラだったこの家族を団結させ、子供の頃に欲しかったものを実現させました。

人はみな、自分の思った通りに行動しているわけではなく、「他人にこう思われたい」と思って行動しているところがあると思います。社会や歴史、家族などに囚われ、思うように生きられないことがあります。ですから私は映画の中で自分が誰だったのかを探し出したのです。”

故郷、トコピージャについて

“当時、両親が店を構えていた通りで撮影を行ったのですが、通りも街も当時と同じ、80年前と何も変わっていませんでした。父の店は火事で消失していましたので映画のために再建しましたが、それ以外は全て一緒でした。映画の中で少年が髪を切るシーンの、日本人の散髪屋さんも昔から変わらずあったものでした。

トコピージャは鉱山の街で、公害による空気汚染がひどく、しかも当時はアメリカの経済不況の影響を受けていました。鉱山の採掘マダイナマイトを使うので手足を無くす人がいる。そこで使えなくなった人がトコピージャに来るわけです。ランプに入れるアルコールを飲んで中毒になっている人も多くいました。

非常に貧しい場所で、電力会社が海を汚染しているので死んだ魚が上がってきます。鳥と貧しい人が魚を取り合っている。そういった、当時目にした風景を美的感覚で作り上げました。先春婦がいるパーティーのシーンもそうです。トコピージャは娼婦でもっていた町とも言えます。鉱物を運ぶ水夫さんがそこに来るわけです。”

©photos Pascale Montandon-Jodorowsky

©photos Pascale Montandon-Jodorowsky

家族の癒しについて

“私は95年に事故で三男のテオを亡くしました。その時私のエゴは崩壊し、悲しい現実に直面したんです。テオを慈っていた末っ子のアダンがテオが亡くなったのと同じ歳になって、この映画を作ろうとしました。テオが亡くなっていなかったらこの映画は出来ていなかったと思います。

この映画では、長男プロディジスが、私の父親を演じています。そして次男クリストバルが行者の役で出演し、私の“師”となっています。アダンは、アナキストの役で出演しています。しかもこの物語を私が実際生まれた街で撮影するのですから、演じる息子たちにとっても深い心理的な経験にもなると思ったのです。私にとって、ただストーリーを語るものではなく、心理的な精神分析や心理的な経験が伴うのが映画です。今回の作品では息子を中心におく事で、重要な要素をそこに封じ込めました。”

過去作品と今

“『エル・トポ』や『ホーリー・マウンテン』を作った頃、私の人生は私だけのものだと思っていました。まだ私の中に寛容さが無かったと思います。選ばれた観客にたいして芸術を作っていたと思います。人生でいろんなことが起こると、この世には自分以外に他の人達も存在するのだという事に気付きます。人間というのは一人でありながら同時に色んな人間が集まって出来ている。日本人方だけはこ〝分かるかもしれませんが、古くから日本で言う「我」は集団の我です。西洋の世界では人間一人対世界という風に見ます。それが本当の事ではないことが段々と分かってきました。ほとんどの芸術家は自分自分のことを語ります。私はある瞬間から自分のことではなく、他の人全員の事を語ろうと思いました。年齢を重ねていくにつれ、芸術に対するビジョンが変わりました。これまではたくさんのメタファーを用い、直接的には物語を語りませんでしたが、本作は直接的に描きました。映画は単なるエンターテインメントではなく、一つの経験だと思います。まるでおじいさんが孫に話をするように、私は円熟の人生をみなさんに語りかけるように映画を作ったのです。

芸術というものは寛容、誠実、正直であるという事を今感じています。若かった頃は成功を求め、良いものを食べたり良い物を持つ為に映画を作りたい思いましたが、今は全くそう思う事は無くなりました。もう何も必要ないのです。私のみだけでなく、みんなのための寛容な芸術を作ろうとしています。”

©photos Pascale Montandon-Jodorowsky

「リアリティのダンス」というタイトルについて

“人生で起こること、この世に存在するものは全ていろんな形で繋がっています。ただ、その中で何が原因で何が結果だということは分からない。もしあなたが意識的になれば、常に瞬間、瞬間で、世界は、人生は変化している事、ダンスをしている事が分かります。あなたも、周りも、全てダンスしているのです。花が開く瞬間も、死ぬ瞬間も、退化していくことも、昼が来て夜が来ることも、ダンスだと思うのです。ですから「リアリティのダンス」というタイトルをつけました。

私は毎朝起きると、生きていることに幸せを感じます。そしてもう一本映画を撮ろうと思うと、より大きな喜びを感じます。私の中のリアリティのダンス”は何かを作り上げることです。芸術だけでなく何か他のものでもそうです。あなたがリアリティのダンスを理解できれば、何も怖いものはありません。”

EVENT REPORT アレハンドロ・ホドロフスキー監督、25年ぶりの来日

写真：西岡浩記

「ホドロフスキーのDUNE」「リアリティのダンス」公開に合わせて、アレハンドロ・ホドロフスキー監督が1989年の「サンタ・サングレ/聖なる血」でのプロモーション来日以来、25年ぶりに日本の地を踏んだ。約1週間の滞在の間、妻のパスカル・モンタンドン＝ホドロフスキーとともに、イベント登壇や番組出演などを精力的に行ない、日身の哲学を日本の観客に伝えた。

4月22日に東京・新橋のヤクルトホールにて行われたプレミア試写会では、タロットカードの研究者としても知られるホドロフスキー監督が、上映後の舞台挨拶とともに、500人の観客の前で「人間タロット」を行った。仮面をかぶった22名が、監督自身が古いマルセイユ・タロットを復刻してデザインした特大タロットを抱えた「人間タロットカード」として舞台に登場。悩みを持つ観客にタロットを引かせ、悩みに答えていった。首に痛みがあり、どんなセラピーを受けても治らないというベルー生まれの青年には、生い立ちを質問していくなかで、お母さんの不在やわだかまりにある痛みではないかと分析し、客席にスペイン語の歌を歌える人はいないかや呼びかけた。ひとりの女性が舞台に招かれると、監督は彼女に彼の首元でスペイン語の子守唄を歌わせ、彼がひいた次のカードを見た監督は「賢くなって、ベルーに帰ってしまった母さんに会いにいってください。そうすれば首の痛みはなくなります」と励ました。

4月23日にはライヴ・ストリーミング番組DOMMUNEに出演。映画評論家の海本誠氏、同じく映画評論家の久保拎子氏、プロレスラーのザ・グレート・サスケ氏、そして美術家／ドラァククイーンのヴィヴィアン佐藤氏とともにトークを繰り広げた。DOMMUNE主宰宇川直宏氏からアートの意義について問われた監督は「アートとは光るウンコだ」と持論を展開。「いまその意味が分からうが分かるまいが、いろんなところに種を撒いていけばいいのです」と語った。4月26日は、東京・世田谷区の龍雲寺にて、1000人近いお寺の中からご選ばれたファン100人と坐禅会を行った。かつてメキシコで日本人禅僧・高田慧雄に5年間師事したホドロフスキー監督は、「お金は魂をよりよくするために使うもの」「ひとつの名前や年齢や国籍、ときて間違っている偏見や考えの中に自分を閉じ込めてしまうこと。それは地球を破壊すること」と説いた。またこの日は吉祥寺パウスシアターで行われている「爆音映画祭」の「エル・トポ」上映時にも登場。アメリカでの公開に絡んでいたところ、今作を観たジョン・レノンが日身とオノ・ヨーコの短編映画の上映の後に今作を流せるよう働きかけてくれたという当時のエピソードを披露した。

COMIC（ホドロフスキーとコミック）

無敵なBD作家の想像力

TEXT：小野耕世（評論家）

ホドロフスキーは少年時代、シュール・ヴェルヌの全作品を読み、奇想に根ざしたアメリカ映画に熱中し、生活の細部に目にするあらゆるものから想像をどこまでもひろげていくトレーニングに没頭することで、過酷な日常を生きのびた。そして成長してからは、自分の見る夢の内容と方向性をコントロールする意識を鍛えていった。彼は、夢を見るちからを、広範囲にわたる自分の創作活動に活かしていったのだった。ホドロフスキーとは、想像力の拡張により、絶えず自己改革を進めてきたアーティストなのである。

彼のコミックスの分野へのかかわりは、1966年にさかのぼるから、最初に映画を監督するより一年早い。そのイマジネーションのひろがりは、優れた画家と組むことで、どんな幻想世界の視覚化も可能になった。例えばメビウスとの共作の長編「アンカル」の場合、その製作過程で、ホドロフスキーが開発した精神療法で苦境のメビウスを助け、この画家の潜在能力をいっきに爆発させたと言えよう。

「メタバロンの一族」など、他のアーティストと組んだ場合も同様で、60冊ものBDアルバムを通じて、ホドロフスキーは、どんなファンタジーをも自在に構想することが出来ることを証明してきた。彼の空想は、太陽系をつらぬく光芒となって全宇宙にのびていく。それほど自由な意識と感覚の持ち主である彼は、おそらくいま最も無敵なBD作家と言ってもいいのではないか。

←アレハンドロ・ホドロフスキー「アンカル」より

LITERATURE（ホドロフスキーと文学）

チリ文学との繋がりに見る ホドロフスキーの反逆性

TEXT：野谷文昭（名古屋外国語大学教授・ラテンアメリカ文学翻訳家）

映画と詩は同じであるというホドロフスキーの多面性を統合しているのは、詩人という側面だろう。生国チリとフランスの国籍を持ちながらも精神的ディアスポラの彼は、ネルーダに次ぐメジャー詩人ニカノル・パーラを「師と仰ぎ」、友人のエンリケ・リーンとともに16歳のころに詩人として出発している。このこと自体が<詩人の国>チリの人間らしいが、彼は典型に収まらない。

彼は<1950年の世代>の一人と見なされることがある。チリの文学を支配してきた土着主義に反旗を翻した一群の作家・詩人である。文学、宗教、政治についての考え方は異なるが、外国文学を受け入れ、前世代に横暴的で、伝統を乗り越えようとする反逆性を共有し、名前は1950年に刊行された短篇集に由来する。このグループに、リーンや後に「夜のみだらな鳥」を書くドノソ、ノンフィクション「ベルリナ・ノングラタ」で知られるエドワーズらがいる。

ホドロフスキーは1953年に国を出るが、この世代と交流があった。興味深いのは、前世代に対する横暴や反逆性、パーラやリーンへの親近感を、後にロベルト・ボラーニョが示していることだ。ホドロフスキーはスペインでボラーニョに会っている。印象を訊くと、「作品の中で作家や作品の良し悪しを批評するのが彼の特徴だね」と答えた。「リアリティのダンス」同様、小説「アメリカ大陸のナチ文学」で、ナチ崇拝という現象を扱ったボラーニョには、どこかホドロフスキーに通じるところがある。

→左より、ジョージ・エドワーズ「ペルソナ・ノングラタ」、ホセ・ドノソ「夜のみだらな鳥」、ロベルト・ボラーニョ「アメリカ大陸のナチ文学」

ART（ホドロフスキーとアート）

『二人のホドロフスキー　愛の結晶』展

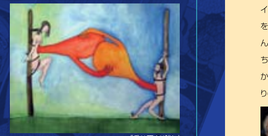
アレハンドロ・ホドロフスキー&パスカル・モンタンドン＝ホドロフスキー夫妻による共作ドローイング展

「リアリティのダンス」でも衣装を担当した妻パスカル・モンタンドン＝ホドロフスキーとのコラボレーションによるイラストレーション展が渋谷のアツコバルーで開催される。

「私たちは子供ができないから、代わりに二人で産んだのがこのドローイングなんだ」とパリの自宅でホドロフスキーに見せられて、これは日本に持ってこようと思った。

彼は30代の頃、メキシコの新聞にファブラスパニカス（すてきなパニック）という漫画を描いていた。実は漫画家の側面も持っている。彼の生み出すすべての表現のように辛辣でロマンチック、ヒステリックで残酷。ぶっ飛んだペン画が妻パスカルの甘酸っぱい水彩カラーで味付けされている。これはまさに愛の結晶。

パリ市の近代アートミュージアムで展示された作品を中心に、エディションものの日本初公開、初販売。ジクレーで手の届きやすい価格です。もちろん二人のサインけき。（文：アツコ・バルー）


「愛は死より強し」

■会期：2014年7月17日（木）～9月21日（日）
水～土曜 14:00-21:00
日～月曜 11:00-18:00／火曜休
※8月12日（火）～19（火）は夏休業

■会場：アツコバルー arts drinks talk
東京都渋谷区松濤1-29-1 5F　TEL.03-6427-8048
http://atsukobaroun.com

■料金：500円（1ドリンク付）

残酷でうつくしい作品。
とても幻想的なのに生々しい。――ヒグチユウコ（画家）

リアリティのダンス

世界を熱狂させた巨匠、アレハンドロ・ホドロフスキー85歳。
23年ぶりに作り上げた、残酷で美しい人間賛歌。

1995年に事故で息子を亡くして以降、アートを作る理由を考え続けてきたというホドロフスキー監督が、生まれ故郷チリを舞台に描いた自伝的作品。権威的な父親との軋轢と和解、ホドロフスキーを自身の父親の生まれ変わりだと信じる、元オペラ歌手の母親との関係、そしてホドロフスキー少年が見た“世界”とは…映画の中で家族を再生させ、自身の少年時代と家族への思いを、現実と空想を瑞々しく交差させファンタスティックに描く。

「これは人々の魂を癒す映画であり、映画の中で家族を再生することで、私の魂を癒す映画でもあった」（アレハンドロ・ホドロフスキー）

監督・脚本：アレハンドロ・ホドロフスキー　出演：ブロンティス・ホドロフスキー（『エル・トポ』）、パメラ・フローレス、クリストバル・ホドロフスキー、アダン・ホドロフスキー　音楽：アダン・ホドロフスキー　原作：アレハンドロ・ホドロフスキー『リアリティのダンス』（文遊社）　2013年／チリ・フランス／130分／スペイン語／カラー／1:1.85／DCP　配給：アップリンク／パルコ　http://www.uplink.co.jp/dance/

⬅ILLUST：ヒグチユウコ

7.12（土）より 新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、立川シネマシティ、シネマ・ジャック＆ベティ、シネ・リーブル梅田 ほか　**全国順次公開**

ホドロフスキーのDUNE

「失敗してもかまわない、それも一つの選択なのだ」スター・ウォーズなどのSF作品に影響を与えた未完の大作を巡るドキュメンタリー!!

メビウス、H.R.ギーガー、ダン・オバノン、サルバドール・ダリ、ミック・ジャガー、ピンク・フロイド等、驚異的な豪華メンバーを配するも、撮影を前にして頓挫した幻のSF大作『DUNE』。その製作過程を、ホドロフスキーをはじめ、5月12日に74歳で惜しくも亡くなったギーガー、プロデューサーのミシェル・セドゥー、ニコラス・ウィンディング・レフン監督等のインタビューと、膨大なデザイン画や絵コンテなどの資料で綴る、映画史上最も有名な“実現しなかった映画”ホドロフスキー版『DUNE』についての、驚愕、爆笑、感涙のドキュメンタリー!

特撮監督を担当する予定だった
ダン・オバノン（左）とH.R.ギーガー（右）

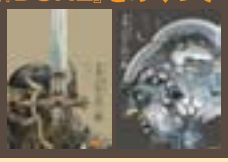
監督：フランク・パヴィッチ　出演：アレハンドロ・ホドロフスキー、ミシェル・セドゥー、H.R.ギーガー、クリス・フォス、ニコラス・ウィンディング・レフン
2013年／アメリカ／90分／英語・フランス語・ドイツ語・スペイン語／カラー／16:9／DCP　配給：アップリンク／パルコ
http://www.uplink.co.jp/dune/

6.14（土）より 新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、立川シネマシティ、シネマ・ジャック＆ベティ、シネ・リーブル梅田 ほか　**全国順次公開**

映画『ホドロフスキーのDUNE』公開直前イベント開催!!

「漫画原作者としてのホドロフスキーメビウスの描いた『DUNE』をめぐって ～勝たずんば死あるのみ、我らメタ・バロンの一族」

- 日時：2014年6月10日（火）　20:00～22:00
- 出演：西島大介、原正人
- 入場料：1,500円+500円/1drink
- 会場：下北沢 B&B（東京都世田谷区 北沢 2-12-4 2F 03-6450-8272）
  http://bookandbeer.com/



『DUNE』幻のストーリーボード発見!!

渋谷パルコ・ギャラリーXにて
お披露目決定!!
➡詳細は公式HPまで

公開記念

［ トークショー開催!! ］

6月14日（土） 柳下毅一郎（映画評論家/特殊翻訳家）× 原正人（翻訳家）

6月18日（水） 氷川竜介（アニメ特撮研究家/明治大学大学院 客員教授）

出演決定 mito（クラムボン）× MMMatsumoto（MARQUEE）

会場：渋谷アップリンク
ほか、連日トークショー開催予定!

➡詳細はHPにて近日発表いたします!

© 2013 CITY FILM LLC. ALL RIGHTS RESERVED

THIS IS ALEJANDRO JODOROWSKY VOL.3
『リアリティのダンス』の世界
発行日：2014年6月5日　発行人：浅井隆（アップリンク）
編集人：駒井憲嗣（アップリンク）露無栄（アップリンク）
デザイン：千葉健太郎

お問合せ：アップリンク　〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町37-18　トツネビル4F
TEL：03-6821-6821　FAX：03-3485-8785
film@uplink.co.jp　http://www.uplink.co.jp

UPLINK　PARCO